

拝啓、天国の君へ

松田奈央貴

ふと目が合った。そして、目を逸らすかと思えば、違ったようで。彼女は僕の目をじっと見つめる。そしてニコリと微笑んだ。その仕草に、僕は思わず動揺してしまった。

ここは電車の中。なのに、思わず叫びたくなかった。だってそうだろうに。目が合っただけに、微笑んだ美しい少女が近くに居るのだから。いや、目が合ったというよりかは、見つめ合ったという方が表現的に正しいのかもしれない。三秒ほど、お互い目を逸らさなかったから。

お互い目を逸らしたあと、僕はもう一度だけ彼女をチラッと見た。ここで気付いたことが一つ。彼女は、僕と同じ制服を着ている。つまり、同じ学校に通う生徒というわけだ。降りる駅も同じだろう。次の駅だ。次の駅で僕らは降りて、学校に向かう。

『まもなく——』

電車のアナウンスが流れる。心臓がバクバクと強い鼓動を打っている。なぜだろう。ただ同じ駅で降りるだけなのに。

『お出口は、右側です』

彼女が先に降りてから、僕も降りようと考えた。後ろ姿でもいいから、彼女のことを見ていたかったからだと思う。

彼女が降りるのを待つ。

しかし、ドア付近に立ったまま降りようとしなない。なぜだろう。時間的にも、ここで降りないと学校に遅刻するのに。わざわざ遠くの駅で降りるのだろうか。いや、そんな面倒なことをしなくてもいいはずだ。そう思った僕は、彼女に声を掛けようとした。「この駅で降りないと遅刻しますよ」なんてことを言おうと思ったのだ。

けれど、身体に緊張が走る。口が硬直し、膝がカクカクと震える。

その状態のまま、三十秒ほど時間が過ぎ、電車のドアは閉じられた。

「あ……」

思わず声が漏れる。と、同時に電車が発車した。

ここで思ったのは、完全に学校に遅刻するということ。そして、もうここまで来たら彼女の後を追うべきだということ。

本来降りるべき駅で下車できなかったのは、半分は自分のせいでもあり、残りの半分は彼女の美しさのせいだと勝手に考えているのだけれど、どうなのか。

『次は——』

ああ、次の駅に向かって電車が進んでいく。けれど彼女は慌てた様子をまったく見せない。もしかして……。

僕はちよっとした推測をする。そして、震える膝にムチを打ち、ゆっくりと彼女に近づいた。傍から見れば、怪しい人かもしれない。けれど、僕はどうしても自分の推測が合ってい

るか確かめたかった。彼女がなぜ、先ほどの駅で降りなかったのかについての推測を。

「あ、あの」

静寂に包まれている車両の中で、彼女に話しかけると、私ですか、といった様子でこちらに目を向ける。その丸い瞳は、僕を緊張させた。

「なんで、前の駅で降りなかったんですか？ 学校、遅刻ですよ？」

そう言うと、彼女は「ふふっ」と軽く笑う。笑うなり、

「今日はサボりたかったんです」

と言った。どうやら、僕の推測は当たっていたようだ。そして、返事で分かったが、彼女も僕のことと同じ学校の生徒と気付いているようだ。

「あなたも、何で降りなかったんですか？」

彼女は首を傾げて僕に問う。

「ええと、それは……」

あなたに見惚れていたから、なんてことが言えるわけがない。なんと答えようか。

「あ、もしかして、あなたもサボりですか？」

彼女は瞳を丸くして、そう言う。僕は何を言えはいいのか分からなかったので、その調子に合わせる。

「そうです、サボりです」

本当は違うけれど。

「何年生ですか？」

「二年です」

「わあ、同じだ」

嬉しそうに言う。素直に可愛いと思った。

「一緒にサボろうよ」

学年が同じと分かると、彼女は急に話しぶりを変える。

「東京まで行こう」

「と、東京まで行くの？」

たかがサボりなのに、ここからは遠い場所の東京に行くなんて。僕がもし単体で学校をサボるなら「家に帰る」しか選択肢は浮かばない。

「お金足りなかったら、私出すから」

「えっとき」

大事なことを聞きそびれていた。

「名前、なんていうの？」

「笹倉京子だよ。君は？」

「僕は、松本雄二」

気付けば緊張はもうなかった。膝がカクカクしていることもないし、何よりちゃんと会話が出来る。

ちよつとしたことで話しかけただけなのに、一緒に学校をサボるなんて。まるで展開の早い恋愛漫画だ。というか、これだとまるでカプルのよう。僕は彼女のことを可愛いとは思えうけれど、好きになつたわけではない。やっぱり遅刻扱いでもいいから、今から学校に行こう。

「あの子、やっぱり僕、学校に……」

「いや、ダメだよ」

まるで、決定権は彼女にあるかの如く言われた。

「今から行つても反省文書かせられるだけだよ。だから今日はサボろう」

これ以上の議論は平行線な気がしたので、僕は自ら負けを認める。

「東京のどこに行こうか。上野まで行く？」

彼女は明るい声を上げて言う。

「もうこの際、どこでもいいよ」

僕はといえば、もはや何もかもどうでもよくなっていた。そんな態度で返事をする。

「じゃあ上野ね」

僕は上野行きの電車に乗っている。なので、乗り換えなしで五十分ほど電車に揺られた。

「上野到着！」

僕は本当に学校をサボって、上野に来た。気持ちがいいほどの程よい日差し。それが学校をサボることに対しての罪悪感をかき消してくれた。

「上野公園に行こうか」

「もうこの際、どこでもいいよ」

電車の中で言ったことと、同じことを口に出す。

彼女は「そっかさっか」と言つて、僕の前方を歩く。このとき気付いたのだけれど、彼女は人を引き付ける力があるようだ。ゆく人ゆく人、彼女をチラッと見て歩いていく。そんな彼女と、僕は一緒に歩いていいのだろうか。ゆく人の一部は、彼女を見たあとに僕を睨む。その視線が怖くて仕方ない。僕は声を大にして「連れ回されているんです！」と言いたかった。

少し彼女と距離を置いて歩こう。歩くスピードを緩め、彼女との距離を作る。すると、彼女は咄嗟にこちらを振り返った。

「なんでそんなに離れているの？」

なんで離れたことが分かったのだろうか。僕は不思議に思った。前を向いているはずなのに、僕が後ろを歩いていることに気付くなんて。後頭部に目でも付いているのだろうか。

僕は「ごめん」と呟いて彼女との距離を縮める。彼女のペースになっている。このままじゃ振り回されそうだし。

彼女はただただ歩く。そして僕も、ただただ後ろをついていく。

「ねえ」

急に立ち止まる。こちらを向き、少しムツとした表情をして、続ける。

「後ろを歩いているとストーカーみたいじゃん。私の横を歩きなよ」

横を歩くと、色々と勘違いされるだろうに。僕はそれが嫌で、後ろを歩いていたのだが。それを伝えようと思ったが、彼女の強い態度に負ける。

「うん」

言われるがまま、彼女の横を歩く。今日初めて会ったから、歩幅を合わせるのが難しい。かといって、それが合わないとまた何か言われそうだ。僕はなんとかそれを合わせようと努力する。

「私ね」

唐突に彼女は話し出す。僕は瞬間的に返事ができず「え、あ、うん」と、少々しどろもどろな口調になる。

「もうすぐ死ぬんだよね」

——え——

僕は驚いて「え」と言ったかと思えば、言えてなかった。口は動くが、声帯が仕事をしない。

驚きのあまり、言葉が発せなくなっているようだ。

「なにか言つてよ。無反応とか悲しい」

「あ、ごめん。あまりにも唐突だったから。というか冗談でしょ？」

彼女は嘘を吐いている。そう思って僕はそう言った。

「これが本当の話でさー。最初に聞いた時は泣いた。それに怖くなった」

彼女の発言が虚言でないことは、表情を見て分かる。真剣そのものだった。

「でもね、どうせ死ぬなら、死ぬことを考えずに最後まで生きた方が得だって気づいたわけだよ」

ふふっ、と笑って続ける彼女。

「死ぬ前にやりたいことが色々あつてねー」

そう言つて鞆からメモ帳を取り出した。それを片手に、

「これに全部書いてあるのだ」

とおどけてみせた。

てっきり中身を見せてくれるのかと思つて、手を差し出すと、彼女はメモ帳を鞆にしまう。「誰にも見せるつもりはないのだよ」

変な口調で喋る彼女は、もうすぐ死んでしまうようには見えない。逆に、希望のある未来を約束された人間のよう。

「さあ、上野公園へレッツゴー」

その日は、上野公園をぐるりと回った。学校をサボったことなんて忘れていた。名所を訪れたり、ちよつとした会話をちよくちよく彼女としたり。そんなことをしていると、あつと

いう間に夕方になった。

「あー。楽しかった」

そう言ったあと「帰ろうか」と彼女は小さく呟く。表情を見て分かる。多分、まだここにいたいのだと思う。

「あ、そうだ！」

テンションが下がっていると思ったが、また一気に快活な様子を見せる彼女。何を言い出すかと思えば、

「連絡先、交換しよう」

そう言って携帯電話を取り出す。

なんだか抵抗があった。今日初めて会った人に連絡先を教えるというのは、どうなのだろう。

「さあ、早くケータイを取り出すのだよ」

また変な口調。僕は洪々と携帯電話を取り出す。メールアドレスと電話番号を交換し合った。

「なんか、すごいよね」

駅へと歩いているとき。ふいに彼女はそう言った。

「なにがすごいのか？」

僕が問う。

「だって、たまたま電車の中で会った人と、学校サボってさ。連絡先まで交換しちゃうなんて」

「確かに、すごいかもね」

心の底からの僕の言葉。

「あ、学校で見かけたら声掛けてね」

「うん。分かった」

そう返事をしたが、学校で会うことはないだろう。お互いクラスが分からない。そしてなにより、僕らの通う学校が広いのも理由の一つだ。

改札口を通過して、駅にて電車を待つ。彼女は疲れたのか、駅では一言も喋らなかった。無言で、ただただ電車を待つ彼女の姿も、やはりもうすぐ死んでしまうようには見えない。やっぱり彼女が言っていたことは嘘なのではないかと、僕は思う。

『まもなく——番線に列車が通過致します』

そういえば……と、彼女に聞いておきたいことがあった。

「あのさ」

「ん？」

「なんでもうすぐ死ぬの？」

「あー、それはね……」

相変わらずの微笑をたたえて、彼女は口を開いた。

その瞬間。

電車が、通過した。線路と車輪がこすれる音。勢いよく走ることによって生まれる風を切る音。それらによって、彼女の言葉はかき消された。なんて言ったのだろう。

「ごめん。もう一回言って」

「恥ずかしいから一回しか言わないのだよ」

恥ずかしい。死ぬ理由に羞恥心を抱く人は初めて見た。死んでしまう理由は、病気だろうか。それとも……。

「もしかして、自分から命を絶つとか？」

「そんな勿体ないことするわけないじゃん。まあ、そのうちに分かるよ」

まあ、これ以上聞いても僕には関係のないことだ。なので、

「そっか。分かった」

と言って納得したフリをした。

『まもなく——番線に列車が参ります』

電車がくる。この感覚は僕だけかもしれないけれど、夕方頃に電車が来ると「ああ、今日も一日を終えたな」と達成感を得る。

——そうか——

このとき思った。人にはそれぞれ、自分だけの感覚がある。彼女も彼女なりの感覚で、死んでしまう理由に羞恥心があるのだろう。それなら聞かない方がいい。気になるけれど。

電車が到着して、乗車する。

「今日は、楽しかったなあ」

「それ、言ったの二回目だよ」

僕がそう言うと彼女は、ふふっと笑う。

「君と一緒に学校をサボってよかったよ。また一緒にどこか行こう」

「もうサボりはしないよ？」

「うん、私も。学校をサボるっていうのは、もう済んだから」

「済んだ？」

「あ、言っちゃった」

そう言っただけで口を手で覆う彼女。それがなんともわざとらしい仕草だった。

「済んだって、どういうこと？」

彼女は少し俯いて、ふうーと溜息を吐く。

「死ぬ前にやりたいことだよ」

死ぬ前にやりたいこと。それを聞くと、また僕の頭に過る。彼女はもうすぐ死ぬというところが。

「死ぬ前に、一回でいいから学校をサボりたかったんだよね」

そう言い終えると、俯くのをやめた。少し顔が赤い気がしたのは、気のせいだろうか。

『まもなく——』

電車内にアナウンスが流れる。すると、スクツと彼女が立ち上がる。

「じゃあ、私は降りるから」

「あ、うん。じゃあね」

「じゃあね」

電車が停車しドアが開く。

軽く手を振り、別れのあいさつをした。やがてドアが音を立てて閉まる。ドア越しに、彼女はまた手を振っていた。なので、僕も手を振り返す。

明日は平日。無論、学校に行く日。今日サボってしまったから、なんだか明日は学校に行くのが億劫だ。

電車が発車し始める。やがて彼女の姿は見えなくなった。と、同時に手を振るのをやめる。彼女はすごい人だった。人を引き付ける力。死ぬことを恐れない勇氣。僕には真似できない。たった一日だけで、彼女のほとんどを知った気がする。おどけるときの口調とか。でも、重大なことを僕は知らない。

——彼女がなぜもうすぐ死ぬのか——

これだけは、本当に分からない。分からないが故に、冗談なのではないかと思うほどだ。けれど、僕がどれだけ考えても関係のないことだし、結論を出せないのが現状なわけで。それに、彼女とはもう会うことはないだろうから、考えるだけ無駄だ。

僕は電車に揺られながら、そんなことを思った。

朝。目を覚ますと、どうにも学校に行く気が起きなかった。理由は昨日サボったからだ。きつとそう。いつの日だか忘れたが、僕の担任が言っていた。「一回学校をサボると、その後もズルズルとサボりたくなる」と。

今の状態がまさにそうだ。

ああ、昨日ちゃんと学校に行けばよかった。上野公園を一周したせいで、足も筋肉痛だし、なにより疲労のせいでまだ眠い。学校の授業中で寝てしまうかもしれない。

昨日の彼女を思い出す。学校で会うことはあるのだろうか。いや、学校は広いし、クラスも違うので会う確率は低いだろう。

身支度を済ませ、徒歩で駅に向かう。ふわぁー、と大きなあくびを掻いた。電車は今日も通常運転で、時間通りに駅にやってくる。その電車に乗り込んだ。ギョウギョウに混雑しているわけではないが、空いている席はない。なので、つり革につかまって、立ちながら自分が降りる駅に着くのを待った。

しばし電車に揺られ、降りる駅まであと三駅。そのとき、携帯電話のバイブレーションが鳴った。朝なのに、誰からの連絡だろう。電車の中で携帯電話を使うのは抵抗があるので、バイブレーションを無視した。

すると、バイブレーションが連続で鳴った。渋々、携帯電話を開いて確認すると、『後ろ向いて』

と記されている。そんなメールが三件。送り主は……彼女だ。僕は、ふと後ろを振り返った。そこには笑顔で小さく手を振る彼女。

『まもなく——』

電車のアナウンスが流れる中、彼女は人の間をすりりと器用に抜けて僕に近づく。

「おはよう」

小声で僕にあいさつをする。

「おはよう」

同じくらいの声の大きさと、あいさつを返す。相変わらずの微笑をたたえている彼女は、羨ましいぐらいに生き生きとしており「昨日の疲れはないの？」と、聞きたくなるほどだ。僕なんて筋肉痛までしているというのに。

「元気ないね。なんかあった？」

すべて昨日のせいです。なんて言えずに、

「何もないよ。眠いだけ」

ちっぽけな嘘を吐く。彼女は「そっか」と爽やかな笑顔をこちらに向けた。まったく、これだから憎めない。

「今日さ、放課後にどこか行こうよ」

「え。いや、あのさ」

「なに？」

僕がこのとき聞こうと思ったのは「なぜ『僕』を誘うのか」ということだった。他にも誘う人がいるだろうに。

それでも、僕はなんだか断れなかった。

「うん。いいよ」

なんで断れないのだろう。これじゃあ、自分の時間がなくなってしまおうというのに。彼女は「よしっ」と小さなガッツポーズを決める。

「遠いところは嫌だよ？ できれば近いところがいい」

僕がそう言うと、

「学校付近にしようか。そうだねー。どこがいいだろう」

彼女は腕を組む。真剣に考えているその様は、一秒一秒を大切に考えているように見えた。いや、実際そうなのかもしれない。だって、彼女はもうすぐで死んでしまうのだから。そんな悲しい未来が待っているというのに、この人は……。強い、なんてものじゃない。人生を悟った哲学者のよう。

「そうだ。カラオケに行こうよ」

「カラオケね。分かった」

放課後の予定が埋まってしまった。まあ、元々なにも予定が無かったので特に問題はないが。

『まもなく——』

あと一駅で、僕らが降りる駅に到着する。

「授業中に何を歌うか考えておこうかな」

「真面目に授業受けなよ」

「どうせ死ぬんだから、勉強したって無駄だもん」

その一言で思わず固まる。返す言葉がない。周りの乗客の数人が、彼女の一言を聞いてこちらを見る。僕は「すみません」といった謝罪の意を込めて、周りの乗客に会釈する。

「なに。ペコペコしているの？」

いや、君のせいなのだけれど。そう言おうとして、飲み込む。

僕らが降りる駅の、一駅前に到着。すると、なぜか彼女は電車を降りた。降りるなり僕の腕を引っ張る。強制的に僕も電車から降りられた形となった。

『ドアが閉まります。ご注意ください』

電車のドアが閉まり、やがて発車した。

「は……？」

思わず固まる。

「さあ、健康の為に歩こうか」

「いや、この駅から学校まで、どれだけ距離あるか知っているの？」

「一時間目終わりまでには着くよ。さあ、行こうか」

一度でいい。一度でいいから彼女の頭の中を覗いてみたい。なにを思っで一駅前で降りたのか。その答えは健康の為ということだが、学校までの距離を考えてみるという話だ。

僕らは改札口を出て、歩き始めた。

完全に僕は振り回されている。ここは一度、毅然とした態度を見せるべきだ。

「ねえ」

「んー？」

「もう僕を振り回すのは、やめてくれないかな」

「……あのさ」

僕の話を遮って、彼女は口を開く。そしてこちらに振り返る。

「お願いします。私の『死ぬ前にやりたいこと』に付き合ってください」

彼女は僕に向かって頭を下げる。

「そんなこと言われても……」

ポトポトと地面に何かが落ちる。液体。僕はそれが何なのか、瞬時に理解した。

涙だ。泣いてまで必死に頼むのには、何かわけがありそうだ。そこまで頼まれたのなら。

「分かったよ。できることなら協力する」

「本当に!？」

先ほどの涙はどこへいったのやら。彼女は満面の笑みだった。

「なっ、まさか嘘泣き!？」

「いいや、嘘泣きじゃないよ。それと、さっきの言葉忘れないからね」

言ってしまった。僕は言ってしまったのだ。協力する、と。

「さ、学校へレッツゴー」

僕らは再び歩き始めた。

「松本……。昨日は学校に来なかったし、今日は遅刻って。どうしたんだ？」

「すみません先生。昨日は体調不良で、今日は朝からお腹が痛くて」

嘘を吐きつつ、謝罪する。

「そういうのはな、事前に連絡するものだぞ？ ほら、反省文」

僕は担任の竹林から、反省文を渡され、職員室をあとにした。

反省文なんて生まれて初めて書く。どういう風には書けばいいのだろうか。俯きながら渡り廊下を歩いた。

「お、反省文じゃん。多分、私も今から貰うかもしれないよ」

聴き慣れた声が、前方から聴こえた。顔を上げると、

「やあ。また会ったね」

彼女がいた。

「とうにかき、クラス離れているんだね、私たち。なんか悲しいよ」

「同じ学校でしょ」

僕がそう言うと、彼女はクスッと笑う。

「私が今日わざわざ、一駅前で降りた理由わかる？」

「分からない」

「死ぬ前に、反省文を書いてみたかったんだよ」

死ぬ前にやりたいことなのに、何だかちっぽけな気がする。どうせなら大きいことをすればいいのに。

「放課後までに、反省文書き終えてね。じゃないとカラオケ行けないから」

「うん」

僕は原稿用紙一行にも満たない返事をして、自分の教室に戻る。彼女は職員室へと入っていった。僕と同じく反省文を貰いにいくのだろう。

放課後。

無事に反省文を書き終えた僕は、職員室に向かっていた。職員室に向かう途中で渡り廊下を通る。そこでまた偶然に、

「あ、反省文書き終わった？」

彼女に会った。どうやら彼女も反省文を書き終えていたようで。

「これでカラオケ行けるね。あー、よかった」

僕らはそれぞれの担任に、反省文を提出する。

職員室から出てきた彼女は上機嫌だった。死ぬ前にやりたいことの一つが達成できたか

らだろう。そしてこれからはカラオケなわけだから、上機嫌になるのは当然といっても過言ではない。

僕らは校門を出て、学校の近くにあるカラオケ屋に向かった。

「二名様ですか？」

「はい」

カラオケ屋に入るなり、彼女は受付をすぐさま済ませる。

「二〇七号室だつて。早く行こう」

そんなに慌てることないだろうに。

カラオケボックスに入ると、彼女はすぐさまデンモクを手に取り、曲を転送した。

「いええい！ 歌います！ ほら、君も盛り上がって」

「わーい。……これでいい？」

「雑すぎるね」

そう言つて彼女は歌いだす。綺麗な声で歌うものだから、思わず聞き惚れる。それに人並み以上に上手い。これは、後から歌う僕がアウェイになりそうな予感がした。

カラオケボックスで彼女はとにかく騒いだ。そして歌つた。僕もちよくちよく歌つたが、彼女並みに上手く歌えず、なんだか劣等感を感じた。

何時間経つただろうかと、ふと携帯電話で時間を確認する。四時に入店して、今はもう八時前だ。

「そろそろ出ようか」

僕がそう言っていると、彼女は「ちよつと待って」と鞆から例のメモ帳を取り出す。そしてペンで何か書いて、またそれを鞆にしまった。

「よし、出ようか」

「あのさ」

「ん？」

彼女のたつた今の行動に、僕は少し気になることがあった。

「カラオケに行くっていうのも、死ぬ前にやりたいことだったの？」

メモ帳に何か記入していたということは、つまりそういうことだろう。

「んー。ちよつと違うかな」

「じゃあ一体……」

「このメモ帳、私が死んだら君にあげるよ。そしたら全部分かるでしょう？」

その一言を聞いて、僕は凍り付いた。なぜそうなったのかは自分でも分からなかったけれど、彼女の死についての何かが頭を過つたのは確かだった。

「分かった。君が死ぬまで謎は解けないってことだね」

「そういうことなのだよ」

カラオケの帰り、駅にて。

「明日も学校だねー」

当たり前のことを言っているが、その当たり前前の明日が、確実に彼女に訪れるとは限らない。もしかしたら、明日にこの世からいなくなってしまうかもしれないのだから。

それでも、僕は普通に返事をする。

「そうだね」

「週末さ、遊園地に行かない？」

唐突に彼女はそう言う。

「また、遊びに行くの？ お金なくなるよ」

「安心して。お金は私が出すから」

そう言って、彼女はニコツと笑う。なぜ僕と出掛けようとするのだろうか。他の友達と遊ぶという選択肢はないのか。

「ねえ。なんで僕となの？」

ちっぽけな疑問をどうにかしたい気持ちが、心から溢れた。

「それはね」

彼女はゆっくり話し始める。僕のちっぽけな疑問が解消される……。

「私が死んだら分かるよ」

僕はガクツと肩を落とした。

「つまり、君が死んだあとに貰えるメモ帳に、すべてが書いてあるわけだね」

「そのとおり」

もう彼女に疑問を持つても、問うのはやめようかな、なんて考えてしまう。

本当にメモ帳によって、僕の疑問は解消されるのだろうか。適当にスルーされているようにしか思えない。

『まもなく——』

駅内のアナウンスが流れる。と、同時に彼女は言う。

「明日、また会えるといいね」

一般の人が言えば、いたって普通の言葉だ。けれど、彼女が言うとき重く感じる。

「うん、そうだね」

僕はごく自然な態度で言葉を返した。彼女の表情を伺う。微笑んでいた。きっと自身では、重く感じさせていると自覚はしていない。だからいつでも微笑んでいられるのだろう。なんて強い人だ。僕だったら苦しくて耐えられない。

週末の土曜日。

今日は彼女と遊園地に行く約束がある。お金は彼女が全部出すという条件で、僕は遊園地に行くことに決めたのだ。

待ち合わせの場所は、僕らの最寄り駅。そこには、なぜか大きい荷物を背負っている彼女がいた。

「どうしたの？ その荷物。遊園地にそんなに荷物が必要かな？」

僕が問うと、

「実は、これから行くところは遊園地じゃないんだ」

と言った。

僕は状況が理解できず「は？」と聞き返す。

「今日は旅行だよ。そして、一泊するのだよ」

やっと状況を理解した。そして思考が回転する。

「いや、ちよつと待つて。条例違反じゃない？ 高校生なのに異性と一泊っていうのは……」

「部屋は二部屋とつてあるよ。安心して」

慌てている僕に対して、彼女は涼しい顔で冷静に言う。

「き、金銭面は？ 相当お金かかるんじゃないの？」

「自分で言うのもなんだけど、私の家、結構お金あるから大丈夫。お父さんからお金たくさんもらつてきた」

彼女は「さあ、行こうか」と僕の手を引く。

ああ、どうなることやら。

旅行先では、色々な場所を回った。すべての行く場所にて彼女は終始、笑顔だった。本当に楽しそうにするものだから、こちらでも思わず笑みが零れる。

「楽しそうだね」

僕はわざとらしくそう言う。

「うん。楽しすぎる」

笑顔で返事をする彼女。

最初、僕は乗り気じゃなかったけれど、だんだんと彼女のペースに持つていかれ、結局は楽しんでしまっている。つくづく思う。彼女には不思議な力があると。

楽しい時間というのはあつという間に過ぎるもので、もう時間帯は夕方だ。

「とりあえず、君の着替えを買わないとね」

「そうだね。服屋なんてここら辺にあるのかな」

「あるよ。私、ここには一度来たことがあつてね」

服屋に向かい、僕の着替えを買ったあと、ホテルへと向かった。

「ねえ」

僕が問いかけると彼女は、

「んー？」

と、気が抜けたような返事をする。

「僕ら高校生なのに、ホテルの予約とれたの？」

「うん、とれたよ」

「どうやって？」

「秘密」

ミステリアスに限る。せめて条例違反でないことを願った。

ホテルの受付にて、彼女は「予約した笹倉です」と従業員に告げる。すると、従業員は彼女に鍵を二つ渡した。

「さ、部屋いこうか」

二〇六号室と記されてある鍵を渡され、彼女とともにエレベーターに乗る。

「高そうだね。このホテル」

「うん。でもいいんだ。これも死ぬ前にやりたいことだし」

「高級ホテルに泊まるっていうこと？」

「だいぶ違うかな」

僕の予想は毎度はずれる。

『二階です』

チーンといった音のあとに、二階に着いたことを告げるアナウンスが流れる。僕らの部屋は二階にあるらしいので、エレベーターを降りた。

「本当にお金大丈夫なの？」

「大丈夫だって」

「そっか……。まあ、心配しないでおくよ」

「そうだよ。お金の心配をしていたら、せつかくの旅行が楽しくなくなるでしょ？」

部屋に辿り着いた。僕の部屋は二〇六号室。彼女の部屋は隣の二〇七号室。

「では、さらばだ」

彼女は、すっかり僕の耳にも馴染んだおどけた口調で話したあと、部屋に入ってしまった。僕も自分の部屋に入る。目に飛び込んできたのは、とてもきれいな部屋だった。こんなところだと落ち着いて眠ることはできなさそうだ。とりあえずベッドに飛び込む。ふかふかだ。前言撤回。このベッドなら落ち着いて眠れそうだ。そのとき。

「おい。入るよー」

部屋の外から彼女の声が聴こえた。慌ててベッドから起き上がり、起立する。彼女が部屋に入ってきた。

「あれ、なんで立っているの？　こういうとき普通は、ベッドにダイブするでしょ」
先ほどやりました。なんてことは恥ずかしくて言えなかった。

「さっき『さらば』って言ったのに、どうしたの？」

「いや、もう夕飯の時間らしくて。一階でバイキングだって」

「あ、なるほど」

「さあ、行こう」

夕飯を済ませたあと、部屋に戻った。今日の疲れが、今になってやってきた。シャワーを浴びて、さっさと寝よう。

『コンコン』

ドアをノックする音が聴こえた。

「どうぞー」

ホテルの従業員だろうか。

「さあ、楽しい夜の時間だよ！」

彼女だ。

「いや、僕はもうシャワー浴びて寝ようと思うんだけど」

「なにを言っているの？ これからが楽しいんじゃない」

そうして、彼女は大量のスナック菓子やらジュースを、僕の部屋のテーブルに広げる。

「さあ、朝まで語ろう」

彼女は缶ジュースを開ける。そしてゴクリと一口飲んだ。「君も飲みなよ」と言わんばかりの顔でこちらを見つめる。

それに負け、彼女に付き合うことにした。

「いやあ、本当にねー。私は嬉しいよ」

彼女は、酒を飲み過ぎた酔っぱらいのような口調で語る。

「なにが嬉しいの？」

僕が問うと、彼女はケラケラと笑う。本当に酔っぱらっているのではないだろうか。

「これを言ってしまうえば、私は恥ずかしくなっちゃうよー。はははっ」

じゃあ、なんで話し始めたのか。そんな言葉を、僕はジュースと共に飲み込む。彼女は早くも二本目の缶ジュースに入った。僕も、ちびちびとオレンジジュースを飲む。そして彼女の話が聞かされる。

「そうだ。恋愛について語ろうよ」

「そういう話は、同性の友達としたほうがいいよ」
僕はそう勧めた。

「君と話したいんだよ」

そう言ってスナック菓子をつまむ。

「好きな人とかいないの？」

彼女がそう問うので、

「いないよ」

と一言で答える。

「ええー。可愛いなって思ったりする人は？」

そこで僕は、彼女と初めて会った日を思い出した。

彼女と初めて会った日。

あの日。僕は彼女を「可愛いな」と思っていた。そしてそれは今でも変わらない……と思う。

「可愛いなって思う人はいる」

「お、いいねー。どんな人？」

ここで「君だよ」なんて言ったら、僕がどうにかなってしまうだろう。それに彼女も対応に困るかもしれない。

「見た目は本当に可愛いと思う。けれど自己中心的なのが欠点かな。そして、なんだか不思議な力を持っていると思う」

「なにそれ。私みたいじゃん」

ちびちびと飲んでいたジュースを嘔きだしそうになる。

「お？ どうしたの？」

「ごめん。咳き込んだ」

「そっかそっか」

ここで、会話が途切れる。お互いジュースを飲んで、何も話さない。沈黙は気まずいので僕が自ら話を振ることにした。

「そういう君は、彼氏とかいそうだよね」

「それは『私が可愛い』という、遠まわしの褒め言葉と捉えていいね？」

ニヤニヤと不敵な笑みを浮かべる。そして、

「まあ、彼氏はいないよ。好きな人ならいるけど」

好きな人……。なぜか気になってしまった。

「好きな人っていうのはさ……」

僕の口は勝手に動く。
やめる。

そう自分に言い聞かせるが、止まらない。

「誰なの？」

僕の口はそう動いてしまった。

「それを言うときあー。恥ずかしいじゃないの」

口が止まらない。

「じゃあ、どんな人？」

「優しいよ。私のわがまま何でも聞いてくれるし。そして、多分だけど今の私を一番知っている人だと思う」

真面目な顔で彼女は言った。

ジュースを飲む手も止まっている。

「そっか。告白しないの？」

僕はまた余計なことを言ってしまう。

「したいけどなー。私、根性無しだし。それに私、もうすぐ死んじゃうじゃん。一緒にいら

れる時間が短いよ」

心臓がバクバクと大きい鼓動を立てる。

「今、電話してみなよ」

「ん？ どうしたの？ 君、今すごく積極的だよ」

我に返った。そうだ。何を言っているのだろう。

「ごめん。盛り上がり過ぎた」

「いや、別にいいんだけどねー」

自分を落ち着かせるように、ジュースを一気飲みする。先ほどの興奮状態と心臓の鼓動は何だったのか。

その後、彼女とは色々な話で盛り上がった。

しばらくして。

「そろそろ寝ようかな私」

朝まで語ろう、なんて言っていたくせに。

「じゃあ、おやすみ」

「うん。おやすみ」

そう言っただけで彼女は、僕の部屋から出ていった。

次の日。

ホテルを出て、朝早くの電車に僕は乗った。意外と空いていたので、座席に座る。彼女も僕の隣に座った。

「あー、楽しかった。だけど眠れなかったなー」

あれだけ盛り上がり過ぎて話をしたのだ。眠れなかったのも無理はないだろう。

「私、ちよつと寝るからさ。乗り換えの駅に着いたら起こして」

「うん」

彼女は目を閉じる。正直、僕も眠りたい。だいぶ疲れが溜まっているからだ。

「……」

目を閉じて数分で、彼女は眠ってしまった。本当に昨夜は眠れなかったのだろう。それに疲労もたまっているだろうし。僕は、ウトウトと眠りそうになりながらも、なんとか目を開けていた。

睡魔と闘っていたそのとき。

左肩になにかしらの感覚を感じた。温かいなにかが乗っているような、そんな感覚。

ゆっくりと左に顔を向ける。僕の左肩には、彼女が寄り掛かっていた。肩で感じる彼女の体温。一瞬思考が止まった。そして。

——バクバクバク——

昨日と同じ大きい心臓の鼓動。この鼓動がなんなのか、やっと分かった気がする。今まで振り回されたり、連れ回されたりしたけれど。僕は、きつと初めて会ったときから恋をして

いたんだ。

そう、僕は彼女のことを、好きだ。

『まもなく——』

もうすぐで乗り換えの駅に到着する。そっと彼女を起こした。

「ああ、まだ寝足りない」

寝ぼけているのか。なかなか席を立とうとしない。

「ほら、降りるよ」

やっと彼女が立ち上がったとき、電車が駅に到着した。

彼女は眠そうな表情を浮かべ、あくびを掻いている。電車を降りて、改札を出る。そして違う駅で電車を待つ。

「ねえ、一つ聞きたいんだけど」

唐突に彼女はそう言う。

「なに？」

「今回、楽しかった？」

心配そうな目で僕を見つめる彼女。答えなんて、決まっている。

「すごく楽しかった」

すると彼女は、くしやりと笑い、

「よかった」

と嬉しそうに言う。

今回の旅は、一生の思い出になった。そう思った。

家に帰って、僕はすぐに自室のベッドに飛び込んだ。そして目を閉じる。今回の旅で思い出になったことをワンシーンずつ頭の中で浮かべながら。

やっぱり一番の思い出は、僕が彼女に恋していることに気が付いたことだ。

ふと、彼女の言葉を思い出す。

——好きな人ならいるけど——

誰なのだろう。それを考えると胸がキュンと苦しくなった。自分だったらいいのに、なんて考えてしまう。

ああ、今すぐ叫びたい。「彼女のことを好きだ」と。

明日、学校で会えたらいいな、なんて思った。

スズメのうるさい朝。

僕は昨日の疲れがありながらも、朝の身支度を済ませ学校に向かった。なんだか、いつもより体が軽い。

人は恋をすると、こんなにも変わるものなのだなあ、と実感した。クラスは違うけれど、学校では彼女に会えるだろう。そう考えると、もつと体が軽くなった気がした。

そんなとき。

携帯電話のバイブレーションが鳴った。メールを受信したようだ。

確認してみると、彼女からのメールだった。ちよつとした高揚感に浸りながら、メール内容を確認すると、僕はその場で凍り付いた。

『今日から入院することになっちゃった。お見舞い来てくれなのだよ。梅沢総合病院にて待つ』

後半のおどけた文章より、前半の文章で僕は啞然とした。

僕は学校に行く足を止める。気付けば、反対方向にある病院に向かって走っていた。

「……!」

病院にて彼女の病室を聞き、やってきた。

彼女は窓際のベッドで携帯電話をいじりながら寝そべっている。ふと視線をこちらに向けてると、驚愕の表情を浮かべた。

「え？ 君、学校は？」

「学校なんかどうでもいいよ！ 体調は大丈夫なの!」

「うーん。見た目は良さそうに見えるでしょ？ でもねー……」

彼女は答えるのを渋っている。

「でも……なに？」

「足、動かないんだ」

頭が真っ白になった。やがて、その真っ白になった頭を、彼女の言葉が真っ黒に埋め尽くす。

そこでやつと理解が追い付いた。彼女は「足が動かない」状態にある。

「それ、治るの？」

「何を今さらー。あれだけでもうすぐ死ぬって言ったじゃない」

そうだった。当たり前のように彼女と過ごしていたけれど、彼女は、もうすぐ……

死ぬ。

「そろそろ私は、この世からいなくなるわけかー。なんか寂しいな」
神様は非情だ。よりによって、なんでこのタイミングなのだろう。

「ごめん。また明日くるから。じゃあね」

「え、あ、うん。じゃあね」

彼女の言葉をまともに聞かずに、僕は病室を飛び出した。

耐え切れなかった。あのまま病室にいたら、自分が自分じゃなくなる。そんな気がした。堪えきれず零れる涙は、ボロボロと止まらない。拭っては零れ、の繰り返しだ。今、時間带的には走って行けば、まだ学校には間に合う。けれど、行く気になれなかった。僕はトボトボと目的もなく、ただ歩いた。なんで泣いているのだろう。彼女が死ぬことは、もう最初から知っていたはずなのに。それなのに。

「うつ、うつ……」

自分が情けない。泣いていることも、彼女に何もしてあげられないことも。適当に歩いていたら、公園に辿り着いた。

歩くのに疲れたので、ベンチに座る。そのときにはもう、涙が止まっていた。

涙が止まると共に、僕は気付いた。医者でもない自分が、彼女に対してできること。可能な限り彼女のお見舞いに行こう。そしてたくさん励まそう。それが僕にできる最大限のことだ。

僕は携帯電話を開いた。そして、彼女にメールを送る。

『さつきはいきなり帰ってごめん。明日、またお見舞い行っていいかな?』

返信は数分で返ってきた。

『本当だよ！ なんてウソウソ。明日、待っているよ』

その日は、遅刻扱いで学校に行った。

翌日。

僕は放課後のホームルームが終わると、走って病院に向かう。

「やあ」

「お、来てくれたね」

「もちろん。でもごめん。明日から四日間くらい来られないんだ。学校がテスト期間に入るから」

「まあ、いいさ。テストを頑張るのだよ」

おどけた口調は相変わらずのよう。

「入院生活って暇じゃない?」

「暇だよ。だからこういう時間はすごくいいんだ」

相変わらずの微笑をたたえる。

「じゃあ、今度来るときは漫画か何か持っていくよ」

「いいね。スポーツ漫画を読みたいな」

「あ、オススメのやつがあるから今度持ってくるよ」

僕らの会話はどんどん盛り上がった。会話が途中で途切れることなどなく。逆に盛り上がり過ぎて看護師に注意されたほどだ。それでも僕は絶えず、笑った。

「ねえ、写真撮ってもいい?」

僕が問うと、

「なんの？」

と、彼女も問うてくる。

「君の写真だよ。ダメかな？」

「いいけど……。急にどうして？」

「いやあ、思い出作りみたいなやつだよ」

すると彼女は笑みを作り、顔の横でピースする。

「撮っていいよー」

「はい、チーズ」

携帯電話からパシャリと音が鳴り、彼女の写真が保存された。

それと同時に時間を確認する。もうすぐで五時だ。そろそろ病室を出ないといけない。

「というわけで、テスト期間終わったらまた来るよ」

「うん。じゃあね」

「じゃあね」

真っ直ぐ家に帰り、教科書を開く。僕のテスト勉強方法はただ教科書を読むだけ。それだけで結構な点が取れる。周りの人には「羨ましい」とよく言われるものだ。

夕飯を挟んで、テスト勉強に没頭する中、携帯電話の着信音が鳴った。誰だろう。

画面を見ると、彼女の名前が表示されている。

「もしもし」

『もしもし。勉強中だった？』

「うん。だけど大丈夫だよ。どうしたの？」

彼女は急に黙りこむ。

「もしもし？ どうしたの？」

『最近、怖いんだよね』

「なにが？」

『死ぬのが』

初めて、彼女が弱音を吐いた。それに僕は少し驚く。

『今まで、どうってことないって思っていたけど、もう二度と君に会えないと思うと急に怖くなって……』

「大丈夫」

『大丈夫じゃない』

彼女は、ぐすんと泣き始める。

「君が死ぬときは、そばにいるから」

『本当に？』

「こんなときに嘘は吐かないよ」

嗚咽を漏らして、泣く彼女。

今まで「死」に対して強気だった彼女だが、いつか怖がる 때가くるといっなのは、微塵も

思ったことはなかった。

『ありがとう。少し楽になった』

「なら、よかった」

『じゃあ、勉強頑張ってね』

「うん。おやすみ」

僕は教科書の続きを読み始めた。

テスト期間を乗り越え、今日は四日ぶりに彼女のお見舞いに行く。学校の正門を出て大通りに出る。

行く前に、彼女にメールをしておこう。

『今からお見舞い行くよ』

返信がくるのを待った。いつも数分で返ってくるから、返信がきたあとに病院に向かおうと考えていた。

十分ほど経ったが、返信がこない。

病院にいる彼女には良くないかもしれないが、電話をかけてみる。

コール音が数回鳴ったあと、応答してくれた。

「あ、もしもし？ 急に電話してごめん。あのさ……」

『あなたが松本雄二さん？』

聞いたことのない声。声的に、四十代くらいだと思う。とりあえず彼女じゃないことは確かだ。

「あの、どなたですか？」

『京子の母です』

そこで僕は、なんとなく察しがついていたけれど問うた。

「あの、京子さんは？」

『京子は、もう……』

僕の手から携帯電話が滑り落ちた。やがて足にも力が入らなくなり、その場で膝から崩れ落ち、泣いた。

まだまだ零れそうになる涙を堪え、歩いて病院に向かう。

病室に入ると「よく来てくれたわね」と、携帯電話から聞こえた声の主、彼女のお母さんがいた。けれど、彼女の姿はそこにはない。

「京子から、君に渡すよう言われたものがあるの。受け取ってくれる？」

「僕は、約束を守りませんでした」

拳を強く握り、言葉を零す。

「え？」

「死ぬときは、そばにいらって約束したのに……それなのに……」

すると彼女のお母さんは、僕の肩にぽんと手を置き、こう言った。

「京子は、あなたのことを待っていたけれど、怒ってなんかいなかった。テスト中だから仕方ないって言っていたわ」

「でも！」

「大丈夫。大丈夫だから、京子からの渡し物を受け取ってほしいの」

そう言って、紙袋を差し出す。それを受け取り、中身を確認した。彼女が使っていたメモ帳。そして一枚の紙。

「家でじっくり読んでみて。きっとあの子はそう望んだはず」

「分かりました」

気力の無い返事をして、病院を後にした。

家に到着し、自室で紙袋から中身を取り出す。

彼女が使っていたメモ帳。これには、死ぬ前にやりたいことが書いてあると言っていた。

ページをめくってみようと思うが、なんだか緊張する。開けてはいけない箱を開けるような、そんな感覚。

それでも、中身を見たい好奇心が勝った。一ページ目をめくる。

『死ぬ前にやりたいこと』

- ・ 学校をサボること 済
- ・ 反省文を書くこと 済

など色々なことが書いてあり、その下には矢印のあとに「済」と書いてある。恐らく「済」と書かれている事柄は、もう達成したものなのだろう。

ページをパラパラとめくると「新しくやりたいこと」とある。

そこには……。

- ・ 松本さんとカラオケに行くこと↓済
- ・ 松本さんと、どこかに一泊旅行すること↓済

などと書かれている。

続いて一枚の紙に手をのばす。広げて、涙を拭いて読む。

『拝啓、いつもクールな君へ。』

私は根性無しだから、一つだけ出来なかったことがあります。それは君に告白することです。初めて会ったとき、覚えている？ 君が話しかけてくれたよね。だんだん君と過ごしていくうちに、優しい人だなあ……と思います。私が死ぬ前にやりたいこと、全部に付き合ってくれてありがとう。最後に、松本雄二くん。君が大好きです。本当にありがとう。以上！』

せっかく拭いたのに、涙が溢れた。視界が滲み、溢れた涙は手紙へと零れる。

僕はとにかく泣いた。涙をどれだけ拭いても、溢れるばかりだった。

数日後。

僕は今、手紙を書いている。誰宛ての手紙かと聞かれれば、こう答える。

「好きな人宛て」

書き出しにもものすごく悩んだ。けれど、伝えたいことを書くのが手紙というものであるの
で、僕は特に考えずに素直に伝えたいことを書く。

手紙を書き終えると、窓から爽やかな風が吹いた。その爽やかさはまるで、記憶に残って
いる、あの笑顔のよう。

『拝啓、天国の君へ。』

人は二度死ぬって聞いたことある？ 一度目は心臓と脳が止まったとき。二度目は人に
忘れられたときなんだって。残念だけど、君はもう一度目の死を体験してしまったね。でも
安心して。僕は君に二度目の死を迎えさせはしないから。天国でも微笑みを絶やさず過ごし
てください。僕も君のことが大好きでした。以上』